

「爪(つめ)の水虫(みずむし)」

ジュニアメンバーの皆さん今日は！

皆さんは「カビ」と聞くとミカンやおもちにつく青カビや、お風呂の黒いカビを思い浮かべるでしょう。カビはパンやワインをつくる「こうぼ」や「きのこ」と同じ仲間です。カビのからだは「菌糸(きんし)」という糸のような形をしていて「孢子(ほうし)」という小さなつぶを作ります。青カビが青く見えるのはこの孢子の色のためです。カビはみそやしょうゆ作りに使われたり、ペニシリンという薬のもとになったりします。また、自然の中で落ち葉などを分解する大切なはたらきもしています。

でも、人に病気をおこすカビもあります。その一つが「水虫」です。水虫は白癬菌(はくせんきん)というカビが足や爪につくことでおこり、かゆみや痛みが出ます。

今回は、走査電子顕微鏡(SEM)を使って「爪の水虫」をしらべた研究を紹介します。

爪はケラチンというたんぱく質でできています。白癬菌はこのケラチンをエサにしてふえていきます。爪の表面はでこぼこした岩のように見えます。白癬菌が爪につくと、菌糸をのばして爪のすき間に入りこみ(図1)、だんだん爪全体に広がります(図2)。そして洋ナシの形をした小さな孢子をたくさん作ります(図3)。家族に水虫の人がいると、この孢子が家の中に広がって、他の人にうつることがあります。でも水虫のくすりを正しく使えば、白癬菌を殺すことができます(図4)。水虫にならないようにするためには、部屋をこまめにそうじして、足をいつも清けつにしておくことが大切です。

(文責 帝京大学医真菌研究センター 西山彌生)

